

信仰のために顯現したる立景、辨證、憧憬等の現象は宇宙の萬差を執取する活動にして受想行等の三助心に推擇せられて表出、蔽識を能縁として生ずる所の轉識は可能なる機能に於てその形式に隨て現はるゝものなるが故に一貫して破るべからざる因縁の法則に隨轉する者なりとし編行、別覽、善地法、煩惱地法、隨煩惱法不定法の各項を設けて之を説明し、最後に第七章に於て五取蘊に就て五蘊との別を論じ本書を結んで居る。

氏が佛敎を心理的方面より研究せんとしたる著眼點とそして浩瀚なる佛敎諸經論より多少この心理的方面に關する章句を抜粹したのであるが然し氏が「佛敎と何等の關係なくして成立せる精神科學がそれ〴〵獨立の權威を主張する現代にありて成立科學の價値を」殆ど「全く顧慮せずして無人の曠野にて頑石に對して説法」するが如き態度を自ら捨てず「取扱ふ事實に就て一般の條理を發見して其知識を系統的に組織しなかつた事とそして」「その研究法を嚴正ならしめなかつた事とは」學者のために大なる便宜」を計らうとした氏の計劃を空しくしてしまつた様に思はれる、忌憚なくいへば本書は眞面目なる意味では決して「佛敎心理の研究」とはいへないのである、只佛敎心理に多少關係ある經論の抜粹、つまり氏が所謂「科學的研究の第一手段として研究の對象となすべき分の科的事實を」煩はしいまでに「可及的に多く蒐集」しそれに時々感想或は説明を加へたに過ぎず、佛敎心理上の語義の如き少しも咀嚼の跡なくそのまゝ書き下し引文の前後文脈の上に何等の組織、統一なく時には殆ど無關係なる引文さへ加はりそれがために全卷

の不首尾を來して居る事は大に吾人の遺憾とする所である、「現代的に佛敎の權威を確證せんとする」著述とも思はれない、然し氏がこの著に拂つた努力に對しては尠からぬ敬意を表して置く。東京、丙午出版、叢行。(本田義英)

神人論

ソロウイヨフ著
關 竹三郎譯

ソロウイヨウの名を始めて聞いたのは四五年前である。彼れが露西亞に於ける有数の思想家であることや北歐の深い神秘家であることなどに少からざる興味をそゝられた吾々にとつては、彼れの哲學の一端を覗ふべき神人論の翻譯を得たことは大なる喜びでなければならぬ。此書が彼れの全哲學體系にとつて如何なる地位を占むべきかは知らない、のみならずソロウイヨウの哲學が思想界にとつて如何なる價値を有すべきかも知らない吾々である。僅かにOssip Louieの現代露西亞哲學(一九〇五出版)やDevenioの「ララジミル、ソロウイヨフ」等によつて彼れの素描を想見し得る吾々としては、暫く譯者の言ふ所と著者の主張する所とに従ふより外はあるまい。譯者によれば、ソロウイヨフは露國唯一の神秘論者である。神秘主義の理論家たるのみならずその實行家である彼の哲學は有機哲學、生命の哲學、全一哲學、愛の哲學である。

そして彼れは其の人格に於てトルストイと共に立ち其の思想に於てオイケンに先驅すると言ふ。著者によれば「一切」の内容は永久常住の活動的實在である。そして此活動的實在が相互活動して現實の萬物を形成する。(九二頁)この複雑なる有機體は內的に一切を包括する最高最廣の觀念である。それは絶對善であり愛の觀念

である。絶對愛は神的本原の内容たる觀念的一切である。絶對善は絶對愛であり、神である(九八—九九頁)と。吾々はこの翻譯がどこまで原著の眞髓と風采とを傳へたるものかは断定することができぬ。たゞ未知の偉大なる思想家の紹介者として譯者の勞を思ふのみである。

因みにルーリエの本からソロウイヨフの主なる著書の名だけを紹介して置かう。

西歐哲學の危機、善の辨明、神學の過去及將來、抽象原理の批判、正義と道德、生命の精神的基礎、三の說話。東京、洛陽堂發行。壹圓貳拾錢。(中川得立)

滅び行く宇宙及び人類

兒 玉 昌著

『天の星、地の動くもの、間、萬象の後に、宇宙の目的人生の歸趣なるものを求めて止まない』著者は、四六版四四四頁、處々に挿圖も入れた此書の前編に、宇宙の構造と其將來を論じて『其の勢力根源は何れにもせよ、一般勢力の原則に従つて、太陽勢力と雖も、早晚盡きる時があらねばならぬ。事實宇宙間に於ける白星、黄星、赤星の存在は、目前之を證明するのであつて、假令、カントの想像したるが如く、又新星なる現象の示すが如く、一旦冷却消滅したる太陽の再び燃え上ることありとするも、而も全宇宙勢力の大勢は滔々として彼の萬物を溶融して止まざる熱死の一大澎湃に向つて注ぎつゝあるのである』と言ひ後編、人類の過去と未來を考へて、『總ての生物の作用、従ひて文明現象も、之を勢力の側から見れば、エントロピーを増加して、宇宙最終の状態た

る熱死の構成に努力しつゝあるものに外ならない。』と言ひ、『自分は、かくして全宇宙を擧げて歩一步一大涅槃の狀態に近づくものと観するのである。眞の天國は茲に見出され、眞の寂光淨土は茲に存在しなければならぬ。』『既に勢力不平均に依つて現出したる森羅萬象である……憂の巷、備みの蔭ならざるなきも其故なりとすべきであるが……唯宇宙を以て苦惱そのもの、悲痛それ自らと觀する所に於て、却て一道の光明を認め、必然の運命に隨順して滅び行く萬有の流れに身を托する所に、却て無礙自在の境涯ありとする。』

誰れがこの見るべからざる宇宙の果てに對する一人の提説を——自分は夫れを欲すると言ひ若くは欲しないと云ひ得る外に——俄に是と言ひ非と言ふ事の出来るものが有らう。著者自らの様に『人の生まるゝを以て憂の始めと』する人々は憧れの心に靜寂な宇宙の死を畫き、逃れ得た人の涼しさを以て『眞の天國』として欣び迎ふべく又生きんとの願ひ飽までも盡なるものは、其生きんとの執着を、吾れと、吾が想見し得る子孫の關知すべからざる世の末にまでも延伸して、『我』は永遠に亡びはしない、エネルギーが働くと云ひ、消滅すると言ふ、皆た『我』の一の方式に過ぎないと信じ、奴方共に研究と思索を通じて、其信念を明かな理論の現證に持來さうと欲するであらう。良し其天性が、彼れの思想をどの方向に傾けさせやはしても、眞率な態度に於てかうした考察に向はうとする限り彼れは必ず、この熱心な態度に於て提出された一説を慎重に熟讀すべき筈であり、そして又、必ず何等かの意味に於て彼自らの研究に寄與する或るものを見出すであらう。……古里